

John Hunter 「補遺」について

水谷惟紗久

日本歯科新聞社／早稲田大学大学院

イギリスの博物学者 John Hunter (1728–1793 年) の “A Practical Treatise on the Disease of the Teeth: intended as a supplement to the Natural History of those parts” (1778 年・以下「補遺」と呼ぶ) は、同年に発行された “The Natural History of the Human Teeth Part 2” (以下「本文」と呼ぶ) を補足する別論文という位置づけである。後者は、同名の 1771 年初版を改定したもので、John Hunter は、Pierre Fauchard (フランス)、Philipp Pfaff (ドイツ) と並んで、近代歯科医学の基礎をなす 18 世紀における三大古典著者の一人と評価され、すでに「本文」は、『人の歯の博物学』という邦題で高山直秀、中原泉によって日本語訳、解説が (1994 年) なされている。

「補遺」の内容の具体的な検討は、それまで明確でなかった近代歯科医療のプロトタイプを再現することに繋がるとともに、その後、19 世紀にアメリカにおいて歯科学校ができる以前の、「医学としての歯科学」の理念型を示唆するものである。

「補遺」は、「歯の疾患に関する実際の論文」なるタイトルより推察しうるように、歯の保存及び病気の治療に関わる内容であり、「本文」の解剖学的所見に比べて明らかな対比を見せている。今回、考察に使用する版は、Eighteenth Century Collections Online (ECCO) サイトに掲載されている Countway Library of Medicine 所収のものであるが、これを見ると、十章立て 128 頁の他、序、インデックス、「本文」の Plate 1 と同様の図版 (歯のない上顎骨、歯のない下顎骨の 2 図) を備えた大著である。

ここには、歯、歯槽突起、歯周、顎のさまざまな病気と異常、及び抜歯、移植などの処置についての解説が掲載されている。序では、歯の健康の保持と歯科疾患の治療は、歯そのものに関わるだけでなく、隣接する部位や身体全部に影響を及ぼすものであるとし、その重要性を訴えている。また、歯科疾患の管理について、医師、外科医とともに、歯科医の関与が必要であるとしている。反面、不十分な知識に基づく会話、書物からの吸収によって誤りを起こすことに対して警告を発し、「本文」において解説された歯の解剖、機能についての知識を持っていることが必要であると述べている。

「本文」においても、う蝕の病態、鉛充填、移植について触れているが、全体に占める割合はわずかしかない。一方「補遺」では、これに対して病態、処置、予後についての記述がほとんどである。例えばう蝕については、初期のホワイトスポットに始まり、う窩が生じてそれが広がって骨側に影響を及ぼすまでの経過が細かに記載されている。そして、歯髄腔内の組織が破壊されると、歯が「死んだ」状態となるとしており、これら一連の見解は、概ね、現代の一般的な理解と一致している。

本報告は、「補遺」の概略を紹介するものであるが、近代歯科医学の視点から類似点、相違点を探すのではなく、医療の社会的な観点で、これがどのように位置づけられるものであるかを考察することにする。